

「個が生きる授業」の創造

～個を取り巻く広い視野から～

副校長 神田 和 正

「個が生きる授業」を求めて、第2年次が終わろうとしている。本年度も授業研究を中核に置き、8名の研究授業を取り上げて、全員で記録を取り協議して研究を深めてきた。この時点に立って、これまでの授業研究を振り返り、次年度の方角を見定めたい。ここでは、「個が生きる」方角を見直し、真に「個が生きる授業」の在り方について考察してみたい。

1. これからの教育の動向

(1) これからの教育を見定める

① 国内の教育は

まず、昨年から本年初めまでの教育界の様々な動きをとらえ、今後の教育の方角を見定めたい。

昨年から初任者研修（教育公務員特例法など）が小学校から本格スタート（4月）した。さらに、新教員免許制度（学校教育法施行規則の一部改正）がスタート（4月1日）した。このことは、教員養成と教師として向上し続けるための修養と錬磨の課題を投げかけている。

週5日制の本格的検討のための調査研究協力者会議が発足（8月29日）した。実施に向っての第一歩を踏み出したわけで、このことは、学校教育の改革を迫るものである。児童の教育をすべて学校にまかせるのではなく、学校・家庭・地域（社会）の三者が協力をしなければならないことへの問いかけである。また、学校教育で担当すべきことは何かも問いかけている。

中教審（第14期）が6年ぶりに再開（4月24日）された。「新しい時代に対応する教育の諸制度の改革について」という文部大臣の諮問を受けて審議に入った。まず、「生涯学習推進への基盤整備について」審議経過の報告（10月31日）をし、本年1月30日にその答申を文部大臣にした。今後各方面にわたって次々と答申が出されるのであろう。このことは、生涯学習体系の中に小学校教育をどう位置づけるかという大きな課題を含んでいる。

1 昨年までの中教審・臨教審の答申を踏まえて、新学習指導要領が昨年（平成元年）3月15日に、小・中・高が同時告示された。戦後5度目の全面改訂である。さらに、幼稚園教育要領も同時に告示された。幼・小・中・高の一貫性をねらった画期的な告示であった。

これらのそれぞれの全面実施は、幼稚園が平成2年度・小学校が平成4年度・中学校が平成5年度・高等学校が平成6年度となっている。全面実施までの移行措置も昨年告示（小・中学校が3月27日に、高等学校が11月20日に）された。小学校は、あと2年間の移行期間があるが、すでに新指導要領による学習は始まっている。

本校では、すでに新学習指導要領の主旨を盛り込んだ平成2年度の教育課程の編成を終えた。この教育課程を踏まえた実践と研究を積み重ね、さらに充実した教育課題としていき、全面実施の平成4年度を迎えたいと考えている。

新指導要領の本格実施を前にして、文部省は、現行の小・中学校の指導要録の改善に着手することになり、「学習指導要録の改善に関する調査研究協力者会議」を設置し、本年1月19日にその初会合が開かれた。新学習指導要領と関連して今後の学習指導の在り方まで踏み込んだ調査研究が協議され、いずれ結果が発表されるであろう。平素の実践・研究を進めている者にとって、今後の動向は目が離せないものである。

毎日の授業を進めるとき、1時間1時間の授業の中に埋没してしまわない広い視野と認識が要求される。そのために、教育界の動向をしっかりと見定めた教師としての心構えを常にもつよう努力しなくてはならない。ここでは、昨年の国内の教育の動向にのみ目を向けて述べてきたが、これに加えて、さらに国内の様々な方面、国外の様々な方面にも目を向けなくてはならない。

② 国内・国外の様々な問題

このところ文部省・総務庁が相次いで平成元年度の教育白書（11月7日）・青少年白書（1月13日）を発表した。またこの間に、文部省が平成元年度の学校保健統計調査の結果を発表（1月5日）した。これらは、児童の個（一人ひとり）にかかわることとして見逃せない。

ここで、これらのそれぞれについて詳述することはできないので、発表された中から今後の教育実践に深くかかわり考えなくてはならないと思われるものを抽出してみよう。

まず、教育白書は、「わが国の文教施策—社会の変化に対応する初等中等教育」と題するもので、第一部「初等教育の課題と展望」を特集し、第二部は「文教施策の動向と展開」となっている。この第一部の中の「学校教育の諸問題」に注目したい。

- ① 学校教育は制度や運営が硬直的。指導法も画一的で記憶力中心の詰め込み教育の傾向が強い。
- ② 受験競争の過熱化で教師、生徒、保護者が精神的にゆとりのない状況に追い込まれている。
- ③ 登校拒否と高校中退問題が深刻化している。

こうしたことへの対応として、以下のようなことをあげている。

- ① 経済的豊かさが増す中で都市化や核家族化の進行で、子どもたちが「自然との触れ合いを通じて生命への畏敬（いけい）の念や勤労の貴さを実感したり、厳しさに耐えることを学ぶ機会が少なくなっている」として、子供の生活面での「体験不足」も大きな問題としている。

また、心豊かな人間や自己教育力の育成という新学習指導要領に基づく教育内容の改善も必要である。

- ② 受験競争の激化対策としては、学歴偏重の社会的風潮を是正するため高校、大学入試の改革と中学生の能力や適性に合った進路指導を行うよう強調している。
- ③ 「児童・生徒が生き生きと学習する場としての学校」になるよう運営の改革を求める。中でも学校長のリーダーシップの発揮を要請している。

次に、青少年白書は、「青少年問題の現状と対策」と題したもので、問題視される青少年行動を非行、不良行為などの「反社会的問題行動」と引きこもりや無気力などの周囲の環境や社会生活になじめない「非社会的問題行動」に大別し、とくに非社会的問題行動について詳しく言及している。

それによると、一日中、自室にこもり食事も自室に持ち込むなど家族との接触まで最小限にしようとする「引きこもり」や、大学生特有の無気力症状（スチューデント・アパシー）が増加していると指摘している。このスチューデントアパシーは学業への興味は失っているのに他の進路を選ぶわけでもなく、結果として長期の留年を重ねるような症状をさし、その原因については、内面的幼児性あるいは自己中心性の肥大化、無気力や無感動の広がりがあると指摘している。

最後に学校保健統計調査の結果発表であるが、この中で、昭和の60余年間の児童・生徒の体位の向上を明らかにしている。身長・体重の大幅な伸びはよいとして、問題は、視力の低下、ムシ菌の増加、肥満傾向である。これからの児童の生活・学習にかかわって注意しなければならない。

これからの日本は、世界の各国とますます協調し、共に発展していかななくてはならない。日本の経済発展が日米間の様々な摩擦を生んでいる。逆に発展途上国からの経済援助を期待されている。世界の中での日本の立場は、経済に限って見ても責任は重くなっている。世界の中の日本、そして世界の中で働く日本人はともに21世紀に向っての大きな課題である。

以上、国内・国外にわたって、大雑把ではあるが、これからの教育の動向に大きく影響を与える

と思われるものに触れてきた。こうしたもろもろの変化や動向をどう受け止め、平素の教育実践・研究に生かすかは、今後の大きな課題である。現在受け持っている児童の一人ひとりが、このように変化の激しい世の中を生きていくことは間違いないところである。

これからの高度情報化・国際化・価値の多様化・核家族化・高齢化・高学歴化などの社会の中で生き抜くことのできる子どもを育成するために、現在本校で取り組んでいる「自ら学ぶ意欲・態度・能力（自己教育力・学習力・生きる力）の育成」と、このための「個が生きる授業の創造（個性化・個別化・多様化）」は、ますます重要である。今後一層の努力をしていかななくてはならない。

2. 「個が生きる授業」のために

(1) 個にこだわる

来る日も来る日も、児童が登校して一日を過ごしているが、その大部分は授業である。授業は学校の生命である。この授業を通して「個が生きる」ようにと努力しているが、このことは言うほどたやすいことではない。この容易ではないことに取り組んでいるわけであるが、ここでは二つの面から考えてみたい。1つは、個にこだわって「個が生きる授業」を考えてみたい。あと1つは、個を取り巻く広い視野から「個が生きる授業」を考えてみたい。

まず、個にこだわって授業を進めていくためには、以下のような視点^(注)は欠くことはできない。

○ 一人ひとりの特性を生かすための資料や教材などの準備

学級に合った準備と個人に合った準備

○ 一人ひとりを生かすための多様な学習活動 十分に取り入れることが大事

○ 一斉授業の際の個人差への対応

学習目標への達成の違いへの対応 学習に要する時間差への対応 興味・関心の違いへの対応

○ 個人差へ対応するための指導法

机間巡視 共同学習・助け合い学習の場を設定 授業中自学の場を設定 放課後など個々に特別な指導 個々に合った家庭学習

どれを取り上げても大変なことであるが、落とすことのできない視点である。これらの視点を生かすのが、次ページの「個が生きる授業の条件」一覧表の中の「自己向上の要因」と「個が生きる基盤」である。

「自己向上の要因」は、自己評価を中核にした評価活動と、自己向上による学習の意欲・態度・能力とを関連づけて考えてみた。この学習過程における児童個々の把握が個にこだわることである。

(2) 個を取り巻く広い視野から

一覧表の「個が生きる基盤」は、児童が生活し学習している場に目を向けたものである。この場は、学校や教師によって意図的につくられた場と児童によってつくられる場とがある。この場をどのようにとらえるかについては、いろいろあるであろうが表に示したように「児童の生活」と「児童の学習」の二つの場を考えた。

こうした場の中で生活し学習する個の把握が大事である。さらに、場の中における個と個・個と集団とのかかわり合いを把握することが大事である。この個の把握、個と個・個と集団とのかかわり合いの把握を基本として、生活集団と学習集団を深め高める配慮（指導）が必要である。これは学級経営とか教科（授業）経営の努力にかかわることである。

「個が生きる授業」をこのように考えていくと、ますます多様で複雑になってくる。ひとつひとつの条件や要因を考えていくと際限がない。毎日毎時間の中ではとてもできないということになってしまいそうである。しかし、あらゆる条件や要因を可能な限り考え明らかにし、自分のものにす

ることによって、自己の授業が見えてくる。平素の授業に当たって、一覧表にのせたすべてを取り上げるのではない。授業を進める中で「個が生きる」ために、何を・どこで・どのように取り上げるかを考えるわけである。この判断もできるようになる。これが教師としての力量である。

個が生きる授業の条件（自ら学ぶ意欲・態度・能力の育成）

課題解決学習	個が生きる授業	自己向上の要因	個が生きる基盤
↓ 1. 学習課題の把握	1. 授業目標の設定 個の到達状況の把握 (目標と評価の一体化) (形成的評価の重視)	1. 学習への興味・関心 学習課題の確認 (個にかかわって)	◎場の把握 個の把握 集団の把握 個と集団のかかわりの把握
↓ 2. 学習課題解決の見通し	2. 学習課題の確認 学習への意欲づけ 学習の手掛り・見通し (学習意欲の強化)	2. 学習課題解決の手掛り と見通し	◎児童の生活 学級 学校 家庭 地域(社会) ○児童の生活集団 規制集団 自由集団
↓ 3. 学習課題解決の活動	3. 個の学習活動の創意 個の学習材の準備 個の学習活動結果集積 (学習努力の強化)	3. 自己内対話 自問・自答	
↓ 4. 学習活動のまとめ	4. 個の学習結果の発表 個の学習結果の補充と修正 (自己評価・相互評価) (教師の評価)	4. 自己確認 自己評価 自己修正 相互評価 教師評価	◎児童の学習 教科 道徳 特活 ○児童の学習集団 規制集団 自由集団
↓ 5. 学習活動の評価	5. 個の学習結果の表現 個の学習課題の確認 (自己向上の確認) (教師の評価の表現)	5. 自己表現 学習の仕方を 知る 学習の能力を 体得	↓ 生活集団 高まり 学習集団 深まり ↑
↓ 6. 次の学習活動の把握	6. 個の学習課題の発表・ 分類→授業目標の設定 (整理・発展・展望)	6. 学習の意欲 学習の意志 学習の努力	学級経営の努力 教科経営の努力 (授業研究推進)

(注) 全国教育研究所連盟 第二回全国集会における宮城県教育研修センターの「個性を生かし、個が生きる教育指導の在り方に関する研究」の小・中教員研調査より抽出。